

田辺市立美術館へのきもち③

私は、本年7月末をもって教員、指導主事、管理職、教育長と43年間の教育人生を大過なく終えることができました。昔から「教育は未来への投資」とよく言われますが、それを改めて感じさせる美術館に関係したお話を一つ紹介させていただきます。

今夏、パリでオリンピック・パラリンピックが盛大に開催されました。屋外競技の多くは、パリ市内のコンコルド広場、ヴェルサイユ宮殿の庭園、パリ市街の歴史的建造物前、そしてセーヌ河やエッフェル塔などを背景に実施されていました。しかも伝統あるユネスコ世界遺産等には影響を及ぼさず、仮設の臨時スタジアムを設け、まるで芸術的価値の高い巨大な絵画の中で各種目の競技が開催されているかのような雰囲気でした。日本では考えられない、このような発想はどこから生まれてくるものかと私なりに考えてみました。

今から45年前の大学生時代、バックパッカー姿の私はルーブル美術館に入りました。真っ先に驚いたのが、平日に入館している一般の人々と同数ほどの中学生や高校生の多さでした。しかも引率の先生と一緒に美術館の中で話を聞いたり、座ってスケッチしたり、まるで美術館へ遠足に来て、館内の作品を体感しながら鑑賞しているような光景でした。

その後に訪ねたオルセー美術館や他の美術館でも、同じような姿を見かけました。学芸員から名画の紹介や作家の説明、鑑賞の仕方、美術館でのマナーを学び、しかも国内の子供や学生は無料で入場することができるとのことでした。係員からは、この取組は子供時代から芸術を身近に感じさせる国策として以前から行われていると聞かされました。

芸術に門外漢の私は、絵画の中では風景画が好きで、大自然や情景を見事に表現する油彩画の迫力と繊細さに圧倒されてきました。また、画家の目から脳へのインプット、そして色彩や技法を通してのアウトプットは、ある意味分かりやすく、芸術鑑賞はまさに頭の柔らかい子供時代には欠かすことのできない学びで、価値の高い学習であると思っています。実物の芸術作品から直接に学ぶ教育に勝るものはないので、美術館で展

示されている作品の紹介や、鑑賞の授業の推進、美術部員の美術館引率などに努めてきました。

現在、田辺市には田辺市立美術館とその分館である熊野古道なかへち美術館の2つの美術館があります。小中学生の観覧料は無料で、学芸員の作品解説も展覧会ごとにされていますが、一層市民が私たちの美術館という意識を高めていくためには、優れた作品を所蔵している美術館であることと、幼少期の子供から高齢者までが親しみを感じる美術館であることの両立が必要であると考えます。幼いころに観たり触れたり、感動した経験は、大人になっても心の深層に残っているものです。パリ市内で育った人々には、幼い頃から生活中に芸術があり、芸術をいつも身近なものとして捉え、誇りに思っているからこそ、先述したようなパリ市街でのオリンピック開催の実施という発想、そして芸術の都パリに相応しいオリンピックの実現に繋がったのだと、私なりに確信をしています。

今後の両美術館運営には、将来への期待と展望をもって、未来ある子供たちへの種蒔きを続けていただくことを願ってやみません。これからは、一市民の立場で美術館を応援していきたいと思っています。

(田辺市教育委員会 前教育長 佐武 正章)



ユネスコ世界遺産に登録されている
長崎の「旧グラバー住宅」にて



作品紹介
祇園南海《五老峰図》

【贊】
海風吹不斷
江月照還空
右節錄青蓮蘆山
瀑布句
【署名】
南海阮瑜
【印】
關防印
落款印
遊印
白文方印「竹裏華夜著處」
朱文方印「阮瑜之印」
朱文円印「白玉氏」
白文円印「宣假」

唐寅（1470～1524）の作と伝わる《蘆山瀑布圖》を模し、贊に盛り込まれた南海は、李白が詠んだオリジナルの詩のみならず、中国においては、胡仔（1110～1170）が詩中の「海風吹不斷 江月照還空」こそが蘆山瀑布の本質を簡潔に捉えた名句であると賞したことと、宋代以降の中国ではこの二句が特に著名になりました。当代一流の漢詩人でもあった南海は、李白が詠んだオリジナルの詩のみならず、中国におけるその後の詩評の変遷にまで精通していたのです。なお、胡仔はこの一句を簡潔と評していますが、その解釈については、布の前に立つと間違なく吹く海風にあてられています。だから、胡仔のことは、氣になるところですが、いすれにしても詩と書をして絵が体となって画面にひとつ的世界を生み出すという「文人画」のスタイルをよく理解し、その理念に沿って自身の芸術を築こうとしていたことがよく伝わります。

「日本の文人画の祖」として讃えられる南海の初期の姿を伝えるものとして、また日本における「文人画」受容の過程をうかがうことができるものとして、重要な作品の一つです。

（学芸員 糸川 風太）



保田龍門《脇村市太郎翁像》 1963(昭和38年)
普段は田辺市立図書館の入口に設置されています

絵画と出会う「この一点!」

近代洋画コレクション展 小企画 一 没後60年 保田龍門

会場：田辺市立美術館（展示室1・2）

会期：2024年12月7日(土)～2025年1月26日(日)

保田龍門（やすだ・りゅうもん／1891～1965、本名は重右衛門）は、現在の和歌山県紀ノ川市に生まれました。号の龍門は、龍門山のそびえる生地、龍門村からとられています。当初は医師を目指しましたが、やがて幼少期から心中にあった画家になると志望を変え、1912（明治45）年、20歳のときに東京美術学校西洋画科に入学します。その前年に上京して接した彫刻の表現にも関心を寄せていた龍門は、西洋画科在学中から実作にも取り組み、以後生涯にわたって絵画と彫刻、双方の芸術を探求しました。1920（大正9）年から1923（大正12）年にかけてアメリカ経由でフランスに渡り、美術館で名画を模写したり、彫刻家のA.ブルデル（1861～1929）やA.マイヨール（1861～1944）らに学ぶなどして帰国しますが、間もなく東京を離れて関西に拠点を移し、展覧会への出品も控えて、委嘱による公共の彫刻作品の制作を主にしてゆきます。

晩年の龍門は、依頼を受けて肖像彫刻をつくることが多く、写真の田辺市立図書館の入り口に設置されている《脇村市太郎翁像》もそうした作品の一つです。脇村市太郎（1874～1960）は、当市の教育と文化の振興に私財を投じて貢献した実業家で、没後の1963（昭和38）年に、二人目となる名誉市民の称号が贈られています。このとき当市は同時に胸像の制作を龍門に委ね、完成した作品は、市制20周年の記念事業として新築された図書館で公表されました。2012（平成24）年に図書館が現在の建物に移った後も、同氏の遺徳を伝える彫刻として公開され、来館者の目に触れ続けています。

来年で保田龍門が亡くなってちょうど60になります。ここに紹介した《脇村市太郎翁像》などの紀南地方と関係する作品も含めて、その芸術を振り返る機会を12月からのコレクション展の中で小企画を組んでもちたいと思います。

田辺市立美術館NEWS ORANGE Vol.41

編集・発行：田辺市立美術館
発行年月：令和6年10月1日

田辺市立美術館

〒646-0015 和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770 FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

田辺市立美術館分館
熊野古道なかへち美術館
〒646-1402 和歌山県田辺市中辺路町近露891
TEL.0739-65-0390 FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/

編集後記

10月から始まる世界遺産登録20周年記念の特別展は、田辺市立美術館（本館・分館）と和歌山県立近代美術館の3会場で同時に開催する大きな展覧会です。週末ごとにさまざまな関連イベントを予定していますので、ぜひ足を運んでもらえばと思います。

芸術の秋を迎えます。皆様のご来館をお待ちしています。(F.O.)

O
R
A
N
G
E

田辺市立美術館NEWS

Vol.41

和歌山からうかがう南画の世界 — 仙境

田辺市立美術館では、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の登録20周年を記念する特別展として、和歌山県立近代美術館との共催で、近代の南画の展開と和歌山の風景表現に焦点をあてる展覧会を開催します。

中国の知識人階級である文人が自娛として描いた絵画のことを「文人画」といいます。この文人たちが職業画家たちの画風を「北宗画」と定義し、それと異なる自分たちの画風を「南宗画」と呼称しました。この「文人画」、「南宗画」が日本にも伝わり、江戸時代中期以降、国内で大いに隆盛します。ただし日本では中国における狭義の「文人」身分ではなく、また日本の文人画とされるものの中には、職業画家たちによる北宗画スタイルも混在していたため、幕末から近代にかけて、「文人画」とも「南宗画」とも区別された、「南画」という呼称が定着していきました。この南画の表現は近代の日本画家たちにも注目され、影響を与えています。南画を志向する画家たちは、しばしば和歌山の豊かな自然を、中国古典に登場する「仙境」に重ねて描いてきました。

展覧会では、近代の南画家たちによる作品を中心に展観して、私たちを取り囲む自然を見つめ直す機会とともに、そこに通じる清らかな南画の世界觀をお伝えしたいと思います。和歌山県立近代美術館、田辺市立美術館、熊野古道なかへち美術館(田辺市立美術館分館)の三会場で同時に開催しますので、それぞれの会場の内容について、ここで簡単にご紹介しておきます。

和歌山県立近代美術館を会場とする第1部では、和歌山が生んだ日本の文人画の先駆である祇園南海をはじめ、桑山玉洲、野呂介石といった江戸時代を代表する紀州の文人画家を、主に田辺市立美術館のコレクションから紹介し、その後の明治から昭和にかけての近代南画の動向を関西の画家を中心にしてうかがいます。

田辺市立美術館を会場とする第2部は、近代南画の世界に足跡を残し



名草逸峰《高士觀瀑圖》 明治17(1884)年
広島県立美術館蔵



土田麦僕《熊野の冬》 大正6(1917)年
茨城県立近代美術館蔵

※熊野古道なかへち美術館で展示

た、特に和歌山とゆかりの深い画家たちについて、時代を追って3章の構成で紹介します。

第1章では主に明治期に活動した画家を取り上げ、近代の南画界において重要な役割を果たした和歌山出身の画家たちのほか、和歌山を訪れた南画家にも光を当てます。左の図版の《高士觀瀑圖》は、文政4(1821)年に紀伊国名草郡(現在の海草郡)名草山の麓に生まれた、名草逸峰の作品です。逸峰は幕末の動乱期、勤王論を唱えて京都で活動しますが、安政5(1858)年から始まつたいわゆる安政の大獄によって仲間の志士たちが投獄されたことで、京を離れて各地を歴訪しながら山水画に没頭するようになります、主に広島や高知で活躍しました。

この作品の賛には、春の山で高士が心地よい滝の音を聞いているうちに、帰宅することを忘れたという意の漢詩が記されています。詩の最後の句「静意在喧中」は、宋代の文人、陸游が、水車の回転音が鳴りやまない田舎のある村を訪れ、その音が逆に自分の心を穏やかにすると詠んだ詩、「題柴言山水」を踏まえたものです。陸游も若い頃に中央で官職に就き、政治活動に奔走しますが、政争に敗れてのちは地方を転々とし、晩年は穏やかな隠棲生活を送りました。こうした陸游の生き方に、逸峰は自身の人生を照らし合わせていたのかもしれません。

第2章は、青木梅岳とその弟子の小野寺梅邱、また福田静處とその弟子の渡瀬凌雲らといった、大正期に活躍した和歌山ゆかりの画家たちの作品を中心にして、旧来の精神と革新的表現が並行あるいは重なり合いながら、新たな近代南画の世界を切り拓いていった様相をうかがいます。

昭和期の作品を紹介する第3章では、日本南画院およびその後身にあたる大東南宗院で活動した大亦観風、湯川三舟、渡瀬凌雲、稻田米花といった、近代南画界で活躍を見せた郷土の画家や、和歌山の風土に心を寄

せた画家たちの足跡を辿りながら、和歌山と彼らの関係に注目します。

日本の文人たちは近世から中国の山水世界を求めて、和歌山をはじめ日本各地を旅し、現地での感興を詩や絵画に託しました。近代においても、近世の文人たちが遊んだ「仙境」である和歌山にあこがれ、多くの画家がこの地を訪れています。那智の雄大な滝や、吉野に連なる熊野の山々、熊野に臨む奇勝絶景の海岸などを目の当たりにした画家たちは、思い思いにその風景を描き残しました。

熊野古道なかへち美術館を会場とする第3部では、そうした近代の南画作品に描かれた、和歌山・熊野の風景を紹介します。

左の図版の土田麦僕の《熊野の冬》は、描かれた場所を特定することはできませんが、題額が示すとおり、麦僕が親しんでいた熊野の冬の風景を描いたものです。麦僕は明治20(1887)年、新潟県佐渡郡新穂村(現在の新潟県佐渡市)に生まれ、京都で日本画を学びました。大正7(1918)年に小野竹喬、榎原紫峰、野長瀬晚花、村上華岳らとともに国画創作協会を結成して、当時の日本画表現を刷新する活動を牽引した画家です。麦僕と和歌山の関係は深く、まだ画塾で学んでいた明治38(1905)年に、竹喬ら塾生たちで本宮、那智山、潮岬など紀伊半島を縦断する旅行をしており、大正5(1916)年には那智、勝浦、新宮、湯崎に、翌年にも新宮へ取材旅行に来ています。

麦僕の他に、富岡鉄斎や富田溪仙といった画家たちも、和歌山・熊野を幾度か來訪して自身の制作に活かしています。彼らによって描かれた当地の姿は、中国の理想的な山水世界、あるいはそれにも優る日本の山水世界に見立てられ、「仙境」としての憧憬を鑑賞者に与えていました。

図版の野呂介石による《紅玉芙蓉峰図》には、陽の光によって赤く染まる早朝の富士が描かれています。款記からは、介石が旅で見た富士の姿を後年に再構成して描いたことが分かります。当時、富士を赤く描くことは大変でしたが、この図における表現は介石自身が富士を五感で体験したことによって初めて生まれたものといえるでしょう。

来年2月から3月にかけて開催するコレクション展では、文人画家たちが「写意」の画を目指して各地を旅し、こうした多様で独特な表現を展開していましたことをお伝えしたいと思います。

旅の体験を描く文人画家たち



野呂介石《紅玉芙蓉峰図》 文政4(1821)年
公益財団法人 脇脇美術会蔵
(田辺市立美術館寄託)

(学芸員 糸川 風太)

INFORMATION

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」登録20周年記念特別展
仙境 南画の聖地、ここにあり

会 場／田辺市立美術館
熊野古道なかへち美術館

会 期／2024年10月5日(土)～11月24日(日)

開館時間／午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休 館 日／毎週月曜日(ただし10月14日・11月4日は開館)

10月15日(火)・11月5日(火)

観 覧 料／田辺市立美術館 600円(480円)

熊野古道なかへち美術館 400円(320円)

※学生及び18歳未満の方は無料

()内は20名様以上の団体割引料金

◆田辺市立美術館では11月5日(火)に一部展示替えを行います。

INFORMATION

文人画コレクション展

会 場／田辺市立美術館

会 期／2025年2月8日(土)～3月23日(日)

開館時間／午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休 館 日／毎週月曜日(ただし2月24日は開館)・2月12日(水)

2月25日(火)・3月21日(金)

観 覧 料／260円(200円) ※学生及び18歳未満の方は無料

()内は20名様以上の団体割引料金

3回目の「くまいで作ろう！」

熊野古道なかへち美術館(くまいで)で講師のアーティストと一緒に作品(熊野で生まれた美術=くまいで)を作り、その成果を公開するワークショップ「くまいで作ろう！」を今年度も開催します。3回目となる今回の講師には、紀南にゆかりのある大阪在住の美術家、河野愛(かのの・あい／1980～)さんをお招きします。河野さんは、場所や人、物の記憶をテーマに、収集した古物や写真などをを使ったインスタレーションを作っています。今年の夏には和歌山県立近代美術館で、「なつやすみの美術館14 河野愛「こともの、と」」が開催され、同館のコレクションと河野さんの作品のコラボレーションによって、今までにない空間が生みだされました。

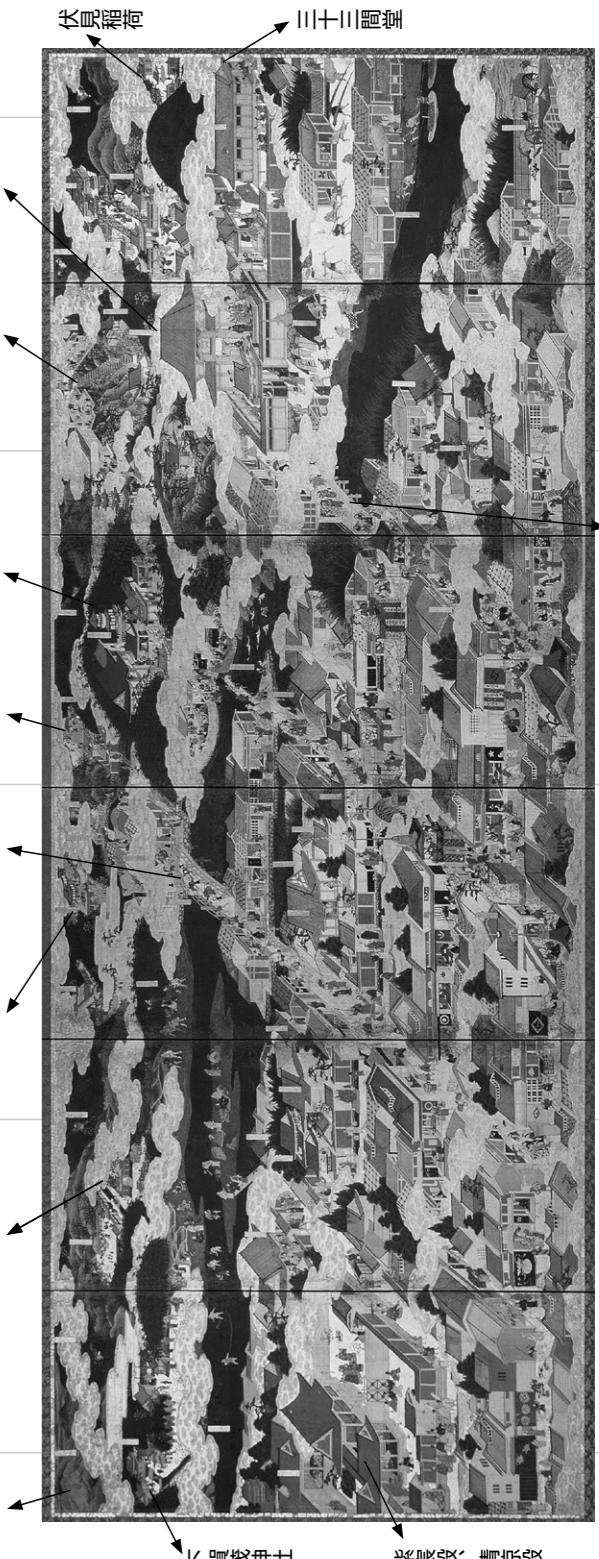
河野さんとの「くまいで作ろう！」のワークショップの詳細が決まりましたら、また当館のHPなどでお知らせいたします。どうぞ楽しみにお待ちください。

(学芸員 知野 季里穂)

会 場／熊野古道なかへち美術館
ワークショップ／2025年3月20日(木・祝)
作品公開／2025年3月23日(日)～3月30日(日)
開館時間／午前10時～午後5時

江戸時代初期の京都

洛中洛外図屏風(如懐)



田辺市立美術館蔵 (脇脇美術会蔵)

江戸時代初期の京都

新しい表現を伝える — アーティストトークの試み

田辺市立美術館のコレクションの軸となっているのは日本の文人画と近代絵画で、展覧会もそれらに関するものを主に開催しています。しかし、当館ではそれにどまらずに、新しい美術表現を紹介することにも注力して、現代の作家による展覧会やイベントを定期的に実施しています。

今年度も4月から6月にかけて熊野古道なかへち美術館(田辺市立美術館分館)を会場に、昨年度末にワークショップ「くまいで作ろう！」の講師を務めていただいた、国内外で注目されている若手陶芸家、橋本知成(1990～)の近年の制作を紹介する「Tomonari



橋本知成によるアーティストトーク 5月25日

Hashimoto Untitled」展を開催しました。また2017(平成29)年から開始している、20世紀後半に国際的に展開された、高度で独創的な織による表現を伝える展覧会シリーズ「現代の織」の7回目を、日本を代表する織作家の一人である佐久間美智子(1945～)の特集として、同じく熊野古道なかへち美術館において7月から9月に開催しました。

この2つの特別展の会期中に、作家をお招きして、展示会場で自身の作品や制作について語っていただくアーティストトークを行いました。

5月25日と6月8日に行った橋本さんによるトークでは、独特の質感をもった作品の制作方法や、特徴的なミニマルな造形、また作品や展覧会のタイトルとしている「Untitled」についてなど、様々な内容をうかがうことができました。佐久間さんにも7月27日と8月17日の2回お越しいただいて、デビュー作となった1973(昭和48)年の《ニュー・プラネット》から、今回の展覧会に合わせて制作された《Breathing-VI》まで、作品を前にして半世紀に亘る創作の歩みをお聞きしました。

今回のそれぞれのトークでは、参加いただいた方々からの質問も多くあり、それに答える作家とのやり取りから、芸術家の思考や作品について深くうかがい、親しみを持っていたけたように思います。現代的な新しい表現に接した方々からしばしば、「よく分からない」、「作家は何を考えているのだろう」との声をお聞きすることができます。すでに亡く

なった作家の場合は、記録などを通してしかその語ったことを知ることができませんが、同じ時を生きる作家からは、直接にその言葉を聞いて、ともに作品を鑑賞することができます。

アーティスト 佐久間美智子によるアーティストトーク 8月17日

トークはそうした貴重な機会を提供する大切な場だと考えています。今後も可能な限り、新しい表現を伝え、それを生み出した作家のことを直に知りたい時間を持つてゆきたいと思います。

(学芸員 知野 季里穂)

会 場／熊野古道なかへち美術館
ワークショップ／2025年3月20日(木・祝)
作品公開／2025年3月23日(日)～3月30日(日)
開館時間／午前10時～午後5時

江戸時代初期の京都

洛中洛外図屏風(如懐)

長崎市立美術館蔵 (脇脇美術会蔵)

江戸時代初期の京都